イマームのガイバ思想と預言者たち

Imām's *Ghaybah*(Occultation) Theory and the Prophets吉田京子^{*}
YOSHIDA Kyoko

ABSTRACT Abū Ja'far Muḥammad ibn 'Alī ibn al-Ḥusayn ibn Bābawayh al-Qummī (d. 381/991), known as al-Shaykh al-Ṣadūq, is one of the foremost doctors and traditionists among the Twelver Shī'is in the 10th century. He composed a book named the *Kamāl al-dīn wa-tamām al-ni'mah* for the vindication of the *ghaybah* (occultation) of the twelfth Imām. In this book, he claimed that the prophets before Muḥammad had set precedents for the *ghaybah* and they had already undergone the same kind of situation as the twelfth Imām. By showing what had happened to each prophet in terms of the *ghaybah* through *ḥadīths*, he expanded the concept of *ghaybah* from what was limited to the twelfth Imām to what was applicable to all *Hujaj Allāh* (pl. of *Hujjat Allāh*, God's proof, *i. e.* prophets and Imāms). This is a unique and new vindicative procedure for the *ghaybah*. In this paper, the author analyses this new *ghaybah* supporting theory by dividing al-Shaykh al-Ṣadūq's argument into three steps: (1) presentation of some *ḥadīths* which imply the possibility of the prophets' entering *ghaybah* conditions; (2) some illustrations of the prophets' *ghaybah*; (3) justification of the twelfth Imām's *ghaybah* by the authoritative precedents of the prophets.

I. はじめに

十二イマーム・シーア派のガイバ論は、260/874年、十一代目イマームが死亡した際に主張されたもので、十二代目イマームにあたる人物が「隠れた状態」にあり、人々の目に見えない形で存在していると考えられる思想である。この思想は他派からの激しい非難を受け、その結果、信者を窮地に追い込み同派の弱体

* 東京大学大学院博士課程

Ph. D. Student, the University of Tokyo

化を招いた。そのため、ガイバの正当性を主張する様々なガイバの書が執筆された。今回はその中から、シャイフ・サドゥーク Abū Ja ‘far, Muḥammad ibn ‘Alī ibn al-Ḥusayn ibn Bābawayh al-Qummi (d. 381/991) の書『信仰の完成と恩寵の完了』*Kamāl al-dīn wa-tamām al-ni‘mah*⁽¹⁾ をとりあげ、その中でシャイフ・サドゥークが展開した独自のガイバ擁護論である預言者のガイバについての議論を検討する。

シャイフ・サドゥークは十世紀後半の十二イマーム・シーア派を代表するハディース学者である。彼は『信仰の完成と恩寵の完了』において、十二代目イマームのガイバの正当化を試みる。シャイフ・サドゥークの時代は、ガイバ期間の長期化による信者達の不信感の増大、信者の他分派特にイスマエイル派への流出、ガイバ論の信憑性の危機などが以前にもまして深刻化した時代であった。⁽²⁾ このような信仰の危機を回避するために、シャイフ・サドゥークは同書で、イマームのガイバの正当化の新しい議論を展開させている。それが過去の預言者のガイバに言及し、イマームのガイバを正当化する議論である。

II. 預言者のガイバ

シャイフ・サドゥークの過去の預言者のガイバを利用した議論は三段階に分けられる。ガイバの事例を預言者に適用する前提となるハディースを示す部分、預言者のガイバの個々の具体的事例を示す部分、預言者とイマームの類似性を肯定する根拠を示す部分である。

シャイフ・サドゥークは第一に、預言者のガイバという発想をする前提として、⁽³⁾ 「神の証」の存在様態に関するハディースを示している。

……神がアダムを創造して以来地上には必ず「神の証」がある。「神の証」は地上では、人々に知られて顕現している状態か、または隠されガイバの状態にあるかのどちらかをとる。終末の時まで、地上には「神の証」⁽⁴⁾ が必ずある。そうでなかったら神は崇拝されないから。

このハディースから、ガイバは「神の証」である人物が、地上に恒常的に存在するための存在様態のひとつとしてとらえられていることが判明する。さらに「神の証」がガイバの状態を選択する背景は以下のようなハディースで説明されている。

「至高なる神の証」が不正な国に現れる場合、それは、その時代の人々

の能力と神の決断に基づいている。仲間（シーア派）や一般の人々（スナナ派）の中に「神の証」が存在するという神の決断が遂行可能な状態なら、「神の証」は顕現する。しかし、それが不可能な状態なら、叡知が義務づけ神の決断が要求するように「神の証」は隠れる。神はそれを覆い隠し、クルアーンの伝える決定された時までその姿を隠すのである。ちょうどアダム—平安あれ—の死以来我々の時代まで、過去の「神の証」がそうであったことが知られているように。⁽⁵⁾

これらのハディースにより、シャイフ・サドゥークは、ガイバには、「神の証」が人々の前に顕現するには困難な状況が存在している場合、神の判断に従って「神の証」がとる「隠れる」という存在様態の意味があることを強調する。そして、これらのハディースにおける「神の証」という表現のもつ広義の意味と、「隠れる」という事例が「過去の神の証にもあった」という表現に基づき、過去の「神の証」であるムハンマド以前の預言者たちのガイバの事例を個々に提示するのである。

以下、シャイフ・サドゥークの引用した預言者たちのガイバの例を紹介する。⁽⁶⁾

①アダム

預言者のガイバは地上最初の預言者アダムから始まる。⁽⁷⁾ アダムのガイバは、ガイバの中で最も深刻なものとしてとらえられている。アダムの創造以前には「神の代理人」や「神の証」が存在せず、アダムのガイバに遭遇した天使達はこのような人物について無知であったためとされる。「神の代理人」としてアダムを創造することに、天使達は反対するが、結局神はアダムを創造し、⁽⁸⁾ 彼への跪拝を天使達に命じるのである。その際、神はアダムを天使達の視界から隠し跪拝を命じたとされ、イブリース以外の天使がそれに応じたのである。⁽⁹⁾

つまりアダムのガイバとは、天使達が「神の代理人」としてのアダムとその能力を知らなかったアダムを創造以前の状態を示している。シャイフ・サドゥークは、天使達がガイバの状態にあるアダムへ跪拝したことを神への信仰の証明として評価し、ガイバの状態にある十二代目イマームを信仰する者をこれらの天使達の立場に、不信仰者をイブリースの立場に相当させている。⁽¹⁰⁾

②イドリース

最初のガイバは預言者イドリースのよく知られているガイバである。⁽¹¹⁾ 彼

の仲間による、それについての要約は以下のようなものである。食糧が得にくくなり、抑圧者が彼らを殺害し、生き残った者も貧しく、生命の危機に恐れていた。すると彼「イドリース」が出現し、〔信者を苦境から〕解放すること、彼の子孫からカーイム⁽¹²⁾が出ることを約束した。そのカーイムはヌーフであった。偉大にして尊高なる神はイドリースを自らのもとの引き上げた。その後仲間の人々はヌーフを何世代も待ち続けたが、彼らは結局災いをもたらす抑圧者の仲間となってしまった。その後、ヌーフの預言者⁽¹³⁾性⁽¹³⁾が出現した。

イドリースは、自らの生命の危機にあい、信者を含む自らの民の前から姿を消した最初の預言者として説明されている。彼は仲間を殺害しその土地を騙し取った王に対し、神からの警告を伝え続けたため、王から命を狙われる。そのため町を離れた洞窟に身を隠すことになる。その際イドリースは自分が願うまで雨を降らせないように神に申し入れ、神はそれを承諾する。雨の降らない状態で彼のガイバは二十年間続き、人々は飢えと渇きに苦しむ。そこで人々は神に雨乞いをする。神はイドリースに雨を降らせるように求めるがイドリースは拒否する。そこで神はイドリースにも食糧を絶つ。そのため彼は町に出て自らの存在を明かすことになる。そして雨を降らせることを条件に、抑圧者やその仲間を神に服従させることに成功するのである。やがてイドリースは、自らの死後再びガイバが起これり人々が苦しむこと、人々を苦しみから解放するカーイム⁽¹⁴⁾はヌーフであることを伝える。

③ヌーフ

ヌーフは三百歳の時、預言者として活動を始めようとするが、彼に対する反発が強く、そのため第七天からの使者に預言者としての活動を禁じられた。その後三百年間預言者の活動を開始するのを待った。そして再び預言者としての活動を行おうとするが、第六天からの使者に預言者の活動を禁じられ、さらに三百年待つ。その後預言者活動を開始し、不正者から人々を解放することを約束するが、彼を信じる者は少数派で被抑圧者にとどまっていた。そのような状況でさらに三世代が経過し、ヌーフの信者たちはたび重なる解放の遅れからヌーフのもとを離れていく。そしてついに洪水が起これり、預言者ヌーフと残った少数の信者のみが救済される。その後ヌーフは次のカーイムとしてフード⁽¹⁵⁾を予言し、自分の知識や任務の継承者であるワスィー⁽¹⁶⁾にサーム⁽¹⁷⁾を指名する。

④サーリフ

フードの次にカーイムとして地上に出現した預言者は、サムード族に対して遣わされたサーリフである。彼がガイバの状態に入った時は容姿端麗な人物として知られていたが、その後の長いガイバの後、彼の容姿について知る者はいなくなり、彼が出現した際、彼がサーリフであり、長年待ち続けていた預言者であると確信した者はごく少数であった。⁽¹⁹⁾

⑤イブラーヒーム

慈悲深き神の友イブラーヒームのガイバに関しては、我々のカーイムのガイバと酷似している。しかし、イブラーヒームのガイバの方がより不可思議である。というのも、偉大にして尊高なる神はその力により、イブラーヒームの母の妊娠中、その兆しが見られず、イブラーヒームは存在を知らなかったのである。そして彼の誕生については、啓典が定め伝えた時まで隠されていた。⁽²⁰⁾

イブラーヒームの父は、当時の権力者であったナムルードの占星術師であった。父はある日、ナムルードの地位や権力を脅かす人物が近く誕生することを占い、それをナムルードに告げる。その人物の誕生を恐れたナムルードは、国中の胎児の殺害を実行した。しかしイブラーヒームの母だけは妊娠の兆候を悟られず、無事出産する。その後、ナムルードから逃れるために、母はイブラーヒームを山中の洞窟で密かに育てる。イブラーヒームは通常の幼児と異なる速さで成長し、やがて人々の前に姿を現す。⁽²¹⁾

⑥ユースフ

ユースフのガイバは二十年間で、その間彼は油もコフルも香もつけず、女性と接触もしなかった。そしてついに神は彼をヤアクブ、兄弟、おじたちと結びつけた。ガイバの間の三日間は井戸の中に、数年は牢獄に、残りの年月は王国にいた。彼はエジプトに、ヤアクブはパレスティナにおり、彼らの距離は九日間の遠さで、彼はガイバの期間中様々な状況にあった。彼の兄弟が彼の殺害に賛同し、彼を井戸の底に投げ込み、少額で彼を売り、大臣の妻が誘惑し、数年間獄中生活をする。その後、エジプトの王が彼のことを思い出し、神が彼と再会させ、彼は王の夢の解釈をした。⁽²²⁾

その後ユースフは、王に認められ高い地位を与えられる。やがて商用でエジプトを訪れた彼の兄弟たちと会見する。その時兄弟たちはユースフには気づか

なかった。ユースフは、兄弟たちが父を引き連れて来るまで自らを明かすことはなかった。その後ユースフは臨終の床で、神がヤアクブの子孫からカーイム⁽²³⁾を出現させ、真理を開示することを予告する。

⑦ ムーサー

……そしてガイバと敵しい状況がイスラエルの民に起こった。彼らはカーイムの立ちあがるのを四十年待ち、ついにその人物の誕生が知らされた。彼らに対する試練は厳しかったが、カーイムの出現の兆しを彼らは見たのである。⁽²⁴⁾

ユースフの次のカーイムとされたのはムーサーである。フィルアウンは、自らの地位や権力を脅かすカーイムの誕生を恐れ、幼児殺害を行う。そこでムーサーの母は彼をナイル川に流した。この時点でムーサーの出生は、母、姉以外からは隠されたことになり、ムーサーの出生時からのガイバが始まる。やがてフィルアウンのもとで成長したムーサーはフィルアウンの仲間を殺害した報復を恐れエジプトを去る。これが彼の民からの第二のガイバである。その後彼はマドヤンの地で家族を得、シナイ山で神と出会い、預言者の使命をもってエジプトに戻る。そこでイスラエルの民を率いてエジプトを出、フィルアウンから人々を救済するのである。ムーサーは次のカーイムがダーウードであることを予告し、自分の知識と使命の継承者であるワスィー⁽²⁵⁾としてユーシュアを指名する。

III. イマームのガイバの正当化

以上七名の預言者のガイバの事例を簡単に紹介した。これら預言者のガイバに関する記述から、シャイフ・サドゥックによる意図的なガイバ解釈が二点見出される。第一は、預言者のガイバが以下のような一定のパターンにそって展開されている点である。

〔預言者のガイバのパターン〕

a 預言者としての活動が困難な状況の発生

b 預言者としての活動の停止／他の場所への移動

c 残された人々の試練と信者の淘汰の期間

まず預言者としての活動が困難な状況や生命の危機さえ生じる事態が起こる。そこで神の決定により、預言者は表立っての預言者としての行動を停止させられる（ヌーフ）か、別の場所に移動させられる（イドリース、ユースフ、ムーサー）。その後、預言者と接触できなくなった信者たちは苦境に陥り、真の信仰が試される。そしてその期間中、疑念を抱くようになった者は淘汰されていく。やがて隠れていた預言者が出現し、この試練に耐えた信者には、預言者が出現した後、解放と救済がもたらされる。また、不信仰者には罰が下される。やがて臨終の際に預言者は「カーイム」と呼ばれる人物を指名する。

シャイフ・サドゥークは、全ての預言者のガイバの事例をこのパターンに基づいて展開させると同時に、このパターンが十二代目イマームにもあてはめられる可能性を示唆する。

第二は、上記のガイバのパターンで登場する「カーイム」についてである。通常「カーイム」という語は、十二イマーム・シーア派のガイバ論においては十二代目イマームを示す言葉として理解されている。しかしシャイフ・サドゥークの主張する預言者のガイバにおける「カーイム」は、十二代目イマームのみを示す言葉として使用されず、預言者ヌーフ、フード、サーリフ、ムーサー、ダーウード、スライマーンを示すものとして使用されている。さらにシャイフ・サドゥークは、これらの「カーイム」と呼ばれた預言者たちを、それ以外の預言者たちと区別しているのである。彼の引用した預言者のガイバの事例では、ガイバの後、不信仰者や抑圧者に罰と復讐をもたらす役割（ガイバのパターン図の e'）は、この六人に限定されている。このことから、シャイフ・サドゥークは「カーイム」を、ガイバの状態を選択した預言者のうち、ガイバの後、信者の救済を行うと同時に不正者に対し罰を与えるという役割をも担った人物ととらえていることが判断される。

このように、過去の「神の証」のガイバの例として預言者たちのガイバの事例を、一定のパターンに従い提示し、さらに「カーイム」という語の意味内容を十二代目イマームのみに関わるものとしてではなく、預言者にも適用されるものとしてとらえることで、シャイフ・サドックは独自のガイバ解釈を示している。その上で彼はこれらの預言者の先例とイマームのガイバを類似の現象として正当化するための根拠を提示する。

第一の根拠はクルアーンに求められる。「使徒についても、我々はそれぞれ優先順位をつけた。その中である者には言葉をかけた。」(2:254),「預言者にも優先順位をつけた。」(17:56)という章句から、預言者と使徒とイマームの間に優先順位が決められていることを認めた上で、「あなた方にとって神の使徒は好例である。」(33:21),「使徒があなた方に与えたものを取り、禁じられたものを取るな。」(59:7)を引用し、預言者を模倣することの正当性を主張する。さらに、イブラーヒームが「イマーム」と呼ばれたことも、預言者とイマームを同一視する根拠のひとつとしてあげている。⁽²⁶⁾

第二の根拠には、ムハンマドの言葉「アードムの知、ヌーフの平安、イブラーヒームの優しさ、ムーサーの賢さ、ダーウードの清貧を見たい者はこれ〔アリー〕を見よ。」⁽²⁷⁾が引用される。これは、ムハンマドが過去の預言者の特質をアリーから類推させようとした事例であるが、このことから、預言者とイマームを類似のものと考えすることは肯定されるという結論を導いている。

第三の根拠としてシャイフ・サドックは、イマームと預言者に共通するワスィーとしての性質から類推を行う。

……我々の預言者〔ムハンマド〕の時代以前の使徒たちのワスィーは預言者であった。つまり、アードムの死から我々の預言者の時代まで、先達の「神の証」の遺言を実行したワスィーは全て預言者であったのだ。……〔しかし〕我々の預言者のワスィーは預言者ではない〔イマームである。〕。というのも、偉大にして尊高なる神は、ムハンマドをこのウンマに対する尊敬、美德である〔預言者の〕封印としたから。従ってイマームと預言者は、ワスィーであるという点で類似しているといえる。……預言者はワスィーであり、イマームもワスィーである。ワスィーはイマームであり、預言者もまたイマームである。預言者は「神の証」であり、イマームも「神の証」である。故に、類似ということにおいて、イマームと預言者の類似

(28)
ほど近いものはない。

シャイフ・サドゥークはこの三つをイマームと預言者の類似性の根拠にすると同時に、これらをイマームのガイバと預言者のガイバを同一視する根拠にし、イマームのガイバが預言者のガイバから類推可能なものであると結論づけた。

IV. ま と め

シャイフ・サドゥークは、ガイバを従来のように「イマームが人々の前から姿を隠している状態」として正当化するのではなく、イマームに限定されない広義の「神の証」に関わる問題として正当化した。第一に、ガイバとは「神の証」が人々の前に顕現できない時にとる存在様態の一つであるという点を再認識させるハディースを提起する。その上で、「神の証」という定義に含まれる預言者のガイバの事例を提示する。このことにより、ガイバとはイマームにのみ起きる現象ではなく、過去の預言者にも実際に起きていた現象であることを確認させる。そして、そのガイバのパターンは今のイマームのガイバの状況にも対応していることを示唆する。さらに、それまでは十二代目イマームの呼称と考えられていた「カーイム」という語を、ガイバの状態から顕現した後、不正者に罰を与える預言者たちにも適用する。この点にも、イマームに対して限定的にとらえられてきたガイバを、より普遍的なものとして認識させようとするシャイフ・サドゥークの意図がみられる。さらに、過去の事実として存在する預言者の行動を、現在のイマームにあてはめる際の最大の障害となる、預言者とイマームの類似性の問題については、預言者とイマームの同一視を許すような三つの根拠を挙げて解決している。

このような経過を経て、シャイフ・サドゥークはこの派のガイバ論の枠組みをイマームにのみ関わるものから、「神の証」全体に関わるものへと広げてとらえる新しい見解を示した。つまり、ガイバとは、「十二代目イマームが姿を隠すこと」ではなく、「神の証の存在様態のひとつ」としてとらえられた。その結果、十二代目イマームのガイバも、一定のパターンで過去からくり返されてきた、「『神の証』のガイバ」のひとつと認識されるのである。また、ガイバ論に登場する「カーイム」という語も、十二代目イマームのみを示すものから、ガイバの後、救済と同時に罰を与える権能をもつ「神の証」を示す語と規定しなおされ、その「カーイム」の一人として十二代目イマームが存在するのとら

えている。

このように過去の預言者の事例を利用し、イマームのガイバの正当化を試みる方法は、シャイフ・サドゥーク独自の方法である。シャイフ・サドゥークは、様々な書で預言者に関する議論を採用し、イマームと預言者の類似性を積極的に認める発言をしている。しかし、預言者とイマームの同一視に大きく依存するような方法は、シャイフ・サドゥーク以外のガイバ論では積極的に採用されていない。その理由としては、イマームと預言者を同一視するにはシャイフ・サドゥークのあげた根拠だけでは不十分であること、シャイフ・サドゥークの採用しているハディースの信憑性が低いことが考えられる。⁽²⁹⁾そのためシャイフ・サドゥーク以降のガイバ論では、預言者に関するハディースを利用した議論はひかえられ、別の側面からの正当化が試みられている。にもかかわらず、⁽³⁰⁾当時の状況を改善するためにシャイフ・サドゥークが採用したこの議論は、彼の思想の傾向や特色を知る上で非常に有効なものであり、また、ガイバ論の生成、発展の過程を理解する上で、さらには十二イマーム・シーア派の預言者観、イマーム観を理解する上でも非常に重要なものであると言えよう。

注

- (1) 同書はイマームのガイバをハディースに依拠して正当化する方法を採用しており、彼以前のガイバの書と同様、ハディース集の形態をとっている。al-Shaykh al-Ṣadūq, *Kamāl al-dīn wa-tamām al-ni'mah*, Qum: Mu'assasat al-nashr al-islāmī li-jamā'at al-mudarrisin, 1401 A. H. [以下、同書は Ṣadūq と略記する。] この分類は、サチエディーナのガイバの書の分類方法に従っており、彼は既存のガイバの書を、ハディースに基づくものと理性に従って論理的議論に基づくものと二分している。A. A. Sachedina, *Islamic Messianism: The idea of Mahdi in Twelver Shi'ism*, Albany: State University of New York Press, 1981, pp. 109-110. 尚、シャイフ・サドゥーク以前のガイバ思想については筆者（山尾京子）の「ヌウマーニーのガイバ論」、『オリエント』第36巻第2号（1993）pp. 18-33 参照。
- (2) Ṣadūq, pp. 2-3.
- (3) 「神の証」とは、神の意思を地上において体现するために神から選ばれた者で、人々を神の道へと導く指導者である。この意味において、預言者、使徒、イマームは全て「神の証」の範疇に含まれると考えられている。al-Kulayni, *al-Uṣūl min al-kāfī*, Tihārān: Dār al-kutub al-islāmī, 3rd ed., 1388 A. H., vol. 1, pp. 168-180. 参照。
- (4) al-Shaykh al-Ṣadūq, *Amālī*, Bayrūt: Mu'assasat al-a'lamī lil-maṭbū'āt, 5th

- ed., 1980, p. 157. 同様なハディースがそれ以外のガイバに関する書でも引用されている。al-Nu'mānī, *Kitāb al-ghaybah*, Bayrūt: Mu'assat al- a'lami, 1983, p. 87, 89, 92. 参照。
- (5) Ṣadūq, pp. 20–21.
- (6) 本文では、以下にあげた7人の預言者に続き、ムーサー以降の預言者たちの記述も設けられているが、本論では章立てのあった7人の預言者にのみ言及する。
Ṣadūq, pp. 153–159. 参照。
- (7) アーダムが預言者であるか否かについては議論の余地があるが、シャイフ・サドゥークはこの議論において彼は預言者の範疇に入れている。アーダムの預言者性については、U. Rubin, “Pre-existence and light”, in *Isreal Oriental Studies*, V (1975), pp. 62–119. 参照。
- (8) クルアーン 2章30–39節, 7章11–16節参照。
- (9) クルアーンでは天使の跪拝は、アーダムが神の命令で全てのものの名を天使達に教えた後で行われており、アーダムが天使達から隠されていたという状況については言及されていない。Ṣadūq, pp. 12–13.
- (10) このアーダムのガイバはそれ以降の「神の証」のガイバとは区別して考えられている。それは、アーダムのガイバの原因が完全に神にあったのに対し、それ以降のガイバの原因は神の敵である不正者たちによる迫害にあったからである。
- (11) アーダムを考慮するとイドリースのガイバは二番目になるが、イドリースはアーダムの子孫のうちで預言者性を受け取った最初の人物と考えられている。G. D. Newby, *The making of the last prophet*, Columbia: University of South Carolina Press, 1989, p. 42.
- (12) カーイムとは「立ち上がる者」「実行する者」「武装蜂起する者」という意味でイマームのガイバ論においては普通十二代目イマームを示す呼称とされている用語であるが、ここでは何人かの預言者に対して使用されている。カーイムについては後にも言及する。
- (13) Ṣadūq, p. 127.
- (14) Ṣadūq, pp. 127–133. ここでのイドリースの物語は旧訳聖書のエリアとアハブ王の物語とエリシャの奇跡の物語の合成と見られる。G. Vajda, “Idris,” in *EI²*, vol. III (1979), pp. 1030–1031.
- (15) アード族に遣わされた預言者としてのクルアーンに登場する預言者。ヌーフの息子サームの子孫で、最初のアラブ系預言者とされる。クルアーン第7章 65–72 節, 第11章50–59節参照。G. D. Newby, *op. cit.*, p. 50参照。
- (16) ここでのワスィーは、預言者の持つ知識を、その預言者の死に際し直接相続し、「神の証」としての役割を担う人物を示し、カーイムとは区別されている。十二イマーム・シーア派におけるワスィーの定義については、A. A. Fayzee, *A Shiite Creed*, Tehran: World Organization for Islamic Sevice, revised ed., 1982, pp. 146–147.

参照。

- (17) Ṣadūq, pp. 133–136.
- (18) クルアーン第7章73–39節, 第11章61–67節参照。
- (19) Ṣadūq, pp. 136–137.
- (20) Ṣadūq, p. 137.
- (21) Ṣadūq, pp. 137–141.
- (22) Ṣadūq, p. 141. ユースフの物語については, クルアーン第12章4–101節参照。
- (23) Ṣadūq, pp. 141–145.
- (24) Ṣadūq, p. 145.
- (25) Ṣadūq, pp. 145–1547 ムーサーの物語については, クルアーン第7章103–160節, 第18章60–82節, 第20章9–98節, 第28章7–43節等参照。
- (26) Ṣadūq, p. 24.
- (27) このハディースはサドゥークの他に, ムフィード, シャイフ・ターイファ等によっても引用されている, シア派内では確定されているハディースの一つである。
al-Majlisi, *Biḥār al-anwār*, Bayrūt: Dār iḥyā’ al-turāth al-‘arabi, 3rd ed., 1983, vol. 39, pp. 35–36. 参照。
- (28) Ṣadūq, p. 26.
- (29) サチェディーナは, トゥースイーがハディース引用におけるハディース学者のいい加減な態度について指摘している点を述べている。A. A. Sachedina, *op. cit.*, p. 110.
- (30) シャイフ・サドゥーク以降のガイバの書で預言者の議論が登場する場合, その根拠とされるのはハディースではなく, 全てクルアーンである。al-Shaykh al-Mufid, *‘Uddat al-rasā’il*, Qum: Manshūrāt maktabat al-Mufid, n. d., pp. 363–365; al-Shaykh al-Ṭā’ifāh, *Kitāb al-ghaybah*, Qum: Manshūrāt maktabat baṣīratī, 1385A. H., pp. 77–78参照。